

六月の終わりから、合唱コンクールの練習が始まる。

校内規模の小さなもので、隣町のコンサートホールを使って行う定例行事。

コンサートホールは近隣の町、村の助成金を合わせて使って建てた多目的ホールで、演劇、映画などにも使用できる。

けれど簡素な山間の町や村に興行に来る物好きも居らず、流行りの映画以外、ほぼ閑古鳥。

少しでも利用実績をあげるために企画されたのが近隣の学校や大学、サークル活動に安く貸し出しており、鬼瓦第二校の合唱コンクールもその一環である。

広くて大きく、声を出すとおもしろいように反響するホールでの合唱は新鮮味があり、歌が好きな子には一大イベントであった。

「~~~~~」

最近、夕方ごろになると校内の至るところから歌声が響いてくる。

テノール、アルト、ソプラノ、バス。複数のパートに分かれて練習をすることもあり、場所が足りず、技術室や理科室も利用されていた。

「はい、それじゃあ、もう一回」

クラス委員の優奈は女子ソプラノの練習リーダーとして指揮を執っている。

女子ソプラノの子達は合唱部、吹奏楽部が多いせいかやる気がある子が多い。練習は順調に進んでいた。

「うん、最初の音程が少し心細いけど、そこは勢いで」

十分な出来に優奈は笑顔でタクトを振るった。

「……………」

男子の練習は参加率が悪く、照れがあつてなかなか声が出ない。これが流行りの歌なら自転車を立ち乗りしながら口ずさむのに。

「もっと声出して。ちゃんと楽譜見て、音階の意味を考えないと」

練習を引っ張るのはクラス委員の文雄。音楽に関心のある子が居らず、消去法でクラス委員が兼任することとなった。

テノールとバスの違い、楽譜の読み方を知らない子も多く、練習は遅々として進まない。それ以上にやる気の無いどころか積極的に足を引っ張ろうとする浩司や大吾が居る。彼らの態度にやる気を削られる子が多いのも原因だった。

「……………」

もう一つ、やる気が無いのが女子アルト。こちらは運動部が多く、新人戦に向けての練習の方を重要視しており、放課後の練習も途中で切り上げてしまう子が多い。

アルトパートを低くて女の子らしさの無い声と思ひ込んでいる子も居り、パート分けに不満があった。

指揮棒を振るう千絵も合唱に関する知識は乏しく、せいぜいカラオケぐらいしか興味が無い。こちらの練習も遅々として進まなかった。

放課後、合唱の練習が終わって教室に戻ってきた優奈は、手芸部へ行く準備をしていた。

「……あーあ、合唱メンドクサイ」

技術室で練習していた千絵がうんざりした様子で教室に戻ってきて、楽譜を乱雑に机の上に置く。

「アルトの練習、やっぱり大変？」

「うん。やっぱりみんなやりたがらないっていうか、部活を頑張りたいっていうし」

そういう千絵もバレー部で、新人戦には出られないものの練習したい気持ちがある。

「そっか。千絵も大変だね」

「うん。でもまあ、男子に比べればまだ良い方じゃないかな」

噂をしていると練習を切り上げた文雄達が戻って来る。

文雄の表情の陰しさから、その成果が芳しくないことがわかる。

「お疲れ様、筒井君。練習はどうだった？」

そんな文雄を千絵が話しかける。彼は、ずれた眼鏡を戻しながら一呼吸置いて二人に向きなおる。

「難しいよ。やっぱりみんなやる気が無いというか、乗り気じゃない。それにやる気が無い人多いし」

「へえ、そうなんだ。誰？」

その問いかけに文雄は一瞬考え込んでからちらりと優奈を見る。

「田所とか……」

「……え、田所君が？ どうして？」

「彼は水泳部だから、着替えの時間が欲しいからって早めに上がろうとするんだ。もちろん彼の言い分もわかる。

水泳部は練習時間が限られているし、そこに着替えの時間も含まれてしまうってことは承知さ。でも、あからさまに抜けられると、他のみんなだって練習に行きたいんだから不満を溜めるんだよ」

「そうなんだ。そっか」

優奈は言葉が継げず、口ごもる。不安の表れなのか、人差し指が自然と唇に触れ、軽く噛んでしまう。

これまでの和正は、困っている自分や他の子に彼なりの気の遣い方を見せてくれた。その和正が、皆が練習している時に自分を優先してしまうことが意外だった。

「また田所？ あいつ本当に迷惑だね」

千絵が言うのとはっと我に返る。

「しょうがないよ、部活あるんだし」

「優奈、部活があるのは皆一緒なんだよ。あたしだってバレー部の練習早く行きたいし」

「……うん。そうだよね。田所君だけ特別扱いするのはよくないよね」

千絵の言い分はもっともであり、事実、和正の机には彼の着替えが置いてある。既に着替えを終えて練習に行っているのだろう。

「それに、コンクールだけじゃなく期末試験あるし、練習練習ってわけにもいかないよね。夏休み中に補習はやだし……」

「それも困った問題だな」

補習とは無縁の文雄だが、それが原因で男子の練習が進まないことを危惧していた。

「一度、先生に相談してみようと思う。このまま僕らだけで考えてもしようがないし、クラスの方針を決めたほうがいいと思うんだ」

「それ賛成かな。あたしもこのままじゃなんの成果もないままだったら続きそうで嫌だし。優奈もそれでいい？」

「うん。そうだね、先生に相談してみれば、何か良い方法が出るかもしれないし……」
やや上の空であった優奈はぶるっと首をふり、慌てて話を合わせて愛想笑いをする。

「うん、じゃあ、僕は今から先生のところに行ってくるよ。二人は部活？ 頑張ってるね」

「うん、お願い」

「ありがとう。それじゃあ」

優奈は笑顔で頷くと、手芸部へ向かった。

＊＊

朝のホームルーム。いつもなら多少騒がしいくらいのだが、その日は静かだった。というのも、今日は少し早めに法子が来たからだ。

担任が早めに来るときは何か起きた時。話し合いという名の一方的な説教が行われ、最後にどう感じたかの感想を提出させられる。

最近だと合唱コンクール関連だろうと察するクラスメートも居り、事実その通りだった。

「ええ、今日はみなさんに考えてもらいたいことがあります。それは、合唱コンクールへの取り組みについてです」

前置きをし、教室をじろりと見わたし続ける。

「七月から夏休みにかけて新人戦を控えている人も多いでしょうけれど、合唱コンクールも重要な行事です。目標に向かって取り組むということを学ぶ大切な勉強なのです。委員の方たちへの聞き取りだと、どうも生半可な気持ちで参加している方が多いようですが、そういうふざけた態度は周りにも悪影響を及ぼします。先生はこれを逆に良い機会だと考えました。合唱コンクールはみなさんの自主性を問いかける良い機会なのです。なので、今後は参加を強制しません。参加したくない人は参加せずとも結構です」

思い切った提案にクラスメート達はどうもきを隠せない。普段の法子なら絶対強制、絶対参加、練習しろ、努力しろ、それがみなさんのためなのですよと言いきって押し切ると思っていたからだ。そのたびに反省文や感想文を書かせるのが仕事なのではというぐらいの法子が、まさか自由参加を提案することが意外だった。

「参加は自由です。今日からコンクールまでの間、みなさんの自主性が試されます。引き続き、リーダーの人を中心として練習を行ってください。以上」

きっぱりと言い切り、反省文の提出は求めなかった。

その後は普通のホームルームが再開されたが、あまりのことにしばらくひそひそ声で憶測が飛びかった……。

＊＊

放課後、和正は水泳部の前に合唱の練習に参加しようと楽譜を持って視聴覚室へと向かった。

野球部やバスケット、サッカー部と違って水着で参加するわけにもいかず、かといって練習時間を削ることもしたくないので、途中退席が多い。なのでせめて休まずに参加しようと考えていた。

そんな彼の思いとは裏腹に、視聴覚室にはあまり人が集まっていなかった。

芳雄がこっちょいと手招きするので隣へ行くと、楽譜を見せてくれるように頼んでくる。どうやら忘れたようだった。

「……なあ、なんか少くないか？」

「仕方ねーよ。先生が朝から自由参加とか言い出したんだから」

「そうだっけ？」

「そうだよ。お前何聞いてるんだ」

「そこ、おしゃべりは控えてくれないか」

無駄話をしていると文雄が注意をする。すまないと軽く頭を下げて、楽譜に目を落す。といっても、和正に音楽の教養は乏しく、音符の列がどういう意味を持つのか今一つわからない。高いところへ行くと高い声になる。何か模様があらば伸ばすなど、簡単なイメージしかなかった。

「……………」

人が少なくなったにも関わらずこれまでとそう変わらない声量。むしろ大きくすらなっていたように思えた。メロディ部分の伴奏程度は弾ける文雄がオルガンをならす。

「ちがう、音外れてるよ。もっとちゃんと楽譜見て」

それに合わせるように指示もする。浩司や大吾が居るとここにあくびや無駄話が入ってしまい、その都度練習が止められてしまっていた。

「……………うん、だいぶ良くなった。まだあと少しあるから、もう一回……」

時計を見るとそろそろ四時を迎えそうだった。

「……悪い、俺着替えがあるから早抜けさせてもらうわ」

和正は芳雄に楽譜を渡し、視聴覚室を出ようとする。

「待ちたまえ、まだ練習は終わっていない」

「だから、悪いっていつてるだろ」

和正としてはいつもの通り参加して、いつも通りに早抜けするつもりだったが、今日の文雄はやけに食い下がる。

「みんなだって部活や勉強があるんだ。なのにどうして君だけ特別待遇にしないといけないんだ？」

「それは確かに悪いけど、プールは利用時間が限られてるんだし、練習は他で出来ないんだから条件が違うだろ」

「話にならないな。君は今日のホームルームの話を聞いていなかったのか？ 真面目にやる気が無いなら参加しなくていい。帰りたまえ」

言い捨てると文雄は他のクラスメートに向きなおり、練習を再開するよう促す。

和正は言い返したい気持ちもあったが、それよりも練習へ早く行くべきと、視聴覚室を後にした。

「……まったく、楽譜も持たない、練習はしない。彼は本当にやる気が無い奴だ」

出ていく和正の耳にそんな嫌味は届かない……。

十十

アルト、ソプラノで合同の練習となった女子達は体育館のステージを借りて練習していた。

ソプラノは引き続き参加者が多かったが、やはりアルトの不参加が多かった。

もともとソプラノの比率が高いこともあり、合同で練習をするとしてもソプラノにつられて高い方を歌ってしまい、そのせいで歪な合唱になっていた。

指揮を執る優奈はその違いに戸惑いつつ、アルトの人に声をはるように頼む。

「優奈、こっちだって一生懸命やってるよ。でも、人少ないんだし、声出せて言われても限度があるよ」

アルトの子は不平そうに言い返す。もともと数が少ない中、せっかく参加してダメだしをされては気分も悪いのだろう。

「ごめん。でも、そうじゃないとアルトのパートが聞こえないし。じゃあ、ちょっとソプラノが声をおさえてみ

よっか」

苦肉の策というべきか安易な策を講ずる優奈。だが、音量をおさえると高音が安定せず、勢いもなくなってしま

う。

「……」

思いつきでうまくいくようなこともなく、場がしらけてしまう。

「どうしよう。何人かアルトのパートに入ってもらえないかな……。できる人っているかな？」
その提案にソプラノの面々はどうしようと顔を見合わせる。合唱部・吹奏楽部の子は多少、声質を下げることできそうだが、楽曲がソプラノメインであり、主役を外されるような感覚があっただけでいいと頷く気になれなかった。

そうこうしている内に時計が四時近くになる。

「ねえ、そろそろ部活に……」

時計を気にしていた子が申し訳なさそうに前に出る。

「あ、うん。じゃあ、今日の練習はこれで解散！ 合唱パートについてはあとで考えておくからね」

今朝の法子の提案のせいで不参加者が目立つ中、最期ぐらいは明るく締めようと作り笑顔を浮かべる。けれど、どこかぎこちなさが残った。

水泳部の練習を終えた和正は、部室で体操着に着替える。

タオルで頭を拭こうとしたところで、タオルを教室に忘れていたことに気付いた。

教室へ戻ると、灯りがついており、優奈の声が聞こえる。あまり明るい雰囲気でないので、和正は邪魔をしないようにとこっそり入る。

「……はあ。どうすれば練習しっかりできるだろう」

女子の方も順調とは行かないらしく、責任感のある優奈の肩にのしかかっているようだった。

「これは優奈一人で解決できる問題じゃないしねえ」

千絵も良い考えが思い浮かばないらしく、腕を組んで難しい顔をしているだけだった。

「あ、田所君。ねえ、男子の方の練習はどうかなあ」

こっそり入ったつもりだが気付かれないはずもない。優奈は早速和正に笑顔で問いかける。

「俺はやる気ないなら帰って言われるぐらいだし」

先ほどの練習を思い出すと、妙にピリピリした文雄のことしか印象にない。もともと合唱に興味が無いこともあり、彼女の望む答えを用意できそうになかった。

「無理無理。どうせこいつはやる気ないし聞くだけ無駄」

鼻で笑って言い放つ千絵にむっとしつつも、事実その通りなので反論はしない。

「まあ、やる気があるかって言われたらちよつとな。俺も水泳部の練習あるし」

「水泳部は練習時間限られてるもんね」

付き合いの長い優奈ならそこら辺の理屈を理解してくれている。ただ、今の練習状況を鑑みると他人のさぼる理由を肯定する気持ちを持つのは難しい。

「それに期末テストもあるし、俺みたいな馬鹿だと参加しづらいんだよなあ」

「それなら、私が勉強を見てあげるから平気だよ」

ニコリと笑う優奈には、去年、かなりお世話になった。できれば今年は地力でどうにかしたいと考えるが、中間

テストの結果を見る限りでは頭を下げるのが賢明だった。

「優奈は田所にだけ甘いよね」

「……」

そこへ文雄がやって来る。彼も優奈に話があるらしい。

「さっき先生と話して来たけど、明日の練習に協力してくれるってさ」

「そうなんだ」

今朝の提案を見る限り、あまり効果的な提案とは思えないが、優奈だけでクラスメート達を鼓舞するより現実的かもしれない。

「女子の方の参加はどうなんだい？」

「うん。ちょっと参加率が悪いかな。ほら、部活が忙しい子も多いし、期末テストの勉強もあるからあんまりね。みんな夏休みに補習受けるのが嫌だから勉強の方をね」

「うん。そうか。でも、期末テストなら、予想問題を作るから、それでフォローすればいいよ」

「本当？ うん、そういう方法もあるね。みんなに協力してもらうために、それぐらい頑張らなきゃ」

「僕は数学と理科、国語を作るよ」

「じゃあ、私が社会と英語を作ればいいかな。うん、多分なんとかなるよ。そうすれば勉強で参加しづらい子も参加できるよね。でも、部活で参加できないって人は……」

「部活の人はしょうがないよ。みんながみんな参加できるわけじゃないし、できそうな人というより、やる気のある人に参加してもらいたいんだ。無理に参加してもらっても、楽譜すら読めないんじゃない」

「楽譜を読めないって、それ合唱以前の問題じゃん」

「千絵、そういう言い方は……。なら楽譜の読み方も教えて……」

「……やる気が無さすぎる人が居るとそういうのは伝染する。怠惰な味方は最大の敵だよ。無理に参加させようとして、逆に皆のモチベーションが下がってしまう。僕は反対だ」

「そう……」

文雄の提案に千絵も無言でうんうんと頷く。

「先生も言ってたじゃないか。今はやる気のある人を選別してしっかりと形になるように練習すべきだと思うんだ。それが近道だよ」

「うん」

頷く優奈を見て文雄は満足し、荷物を準備する。

「それじゃあ、また明日。練習は合同になるよ。音楽室が借りれるから」

「みんなには朝のホームルームで言っておくね」

一応の進展を見せたことで肩が軽くなった優奈は、ようやくほっとした笑顔を浮かべていた。だが、それもすぐに曇る。

「……君は参加しなくていい。やる気の無い奴はいるだけ邪魔だ」

文雄はタオル片手に頭を拭いていた和正を睨み、きつい口調で言いきる。

「ああ、そう。悪いな。俺も水泳部があるから助かるわ」

やる気の感じられない和正の態度に文雄は舌打ちだけ残し、教室を出て行った。

「なんだ、あいつ」

和正は髪を拭き終えると、雑に荷物を鞆に詰め込み、文雄と逆方向で出て行った。

「あ、待ってよ、和正君」

それを見て優奈も慌てて教室を出る。咄嗟のことに呼び方が戻っていたことに、千絵はやれやれと手を振ってい

た……。

＊＊

帰り道、並んで歩くのは久しぶりだった。

少し前は和正が自主トレで早く帰り、最近の水泳部の練習で遅く帰る。そのため時間が合わず、中間テスト前以来だった。

「……ねえ、和正君」

「なんだ？」

「練習なんだけどさ、協力してもらえるのになって……」

「ん？ ああ、練習は今日も参加したぞ。ただ、どうも委員長の癪に障ったみたいで帰れって言われたけどな」

「でも、参加はしてるんだよね！」

軽い気持ちで言ったつもりが、優奈はくっつかかのように話しかける。

「あ、ああ。まあ、一応」

「……良かった。和正君はサボるような悪い子じゃないよね」

「悪い子って……。でもなあ、参加って言われても、俺は楽譜とか読めないし、よくわかんねーよ。期末テストの勉強も不安だし、補習になったら八月九月の大会参加がなあ」

「勉強なら私が協力するよ。だから、一緒に頑張ろう。大丈夫だよ。楽譜の見方もちゃんと教えてあげる。そうだ、今少し練習しよう？ そうしたらきつと筒井君もわかってくれるよ」

そういうと優奈は和正の腕を取り、近くの公園へ引っ張っていこうとする。

「……！！」

ぼんやりしていた和正だが、肘に感じたブラウスの固さとぽよんとした感触に目が覚める。

「いいよ。別に」

乱暴に振り払うようにして優奈から離れる。咄嗟の事に自分でも何を驚いているのだろうと目をぱちくりしてしまふ。

驚く優奈を見て、慌てて取り繕うように言葉を選んだ。

「ごめん、ちょっと水泳で腕捻ってさ……。それと、ちょっと疲れてたから」

「そう。そっか。それじゃ仕方ないね。和正君は運動部だもん。疲れてるよね」

「あ、いや、まあ……」

「うん。私こそ強引にごめんね。ただ、ちょっと合唱の練習が気になってて」

「……うん」

かすかに胸に腕が触れただけのこと。たったそれだけのことに驚いて優奈を振りほどいてしまった自分の小ささが情けなくなる。その一方で優奈は何も気づいていなかったのだろうか。

お互いもう性的な意識を持っても良いはずなのに、彼女はまだこれまでのように無邪気に近づいてくる。それは自分が男としてみられていないのか、それとも彼女が性を意識していないのか。

「優奈もあんまり俺に構わなくていいんだぞ」

「え？ 和正君？」

「勉強だって忙しいんだろ？ 進学目指すって聞してるし」

「私、そんなこと話したっけ……」

「おばさんから聞いたよ。勉強もあるのにクラス委員、合唱の練習リーダー、そこに俺のお守りまであったら大

変じゃん」

「お守りなんて、そんなつもりは……」

「それにたかだか学校行事じゃん。そんなに気合入れないでさ」

「学校行事だけど、私は一生懸命してるし……」

「そりゃ優奈が頑張ってるのはわかるけど、でも、なんでもかんでも完璧にこなそうなんて思わないほうがいいぞ。もうちょっと力抜いてさ。ほら、委員長だって言ってただろ。やる気ない奴は切ってみたいにさ。俺、言われてムカツクっちゃあムカツクけどさ、あながち間違ってると思うんだ」

「和正君……？」

「だから、優奈は優奈のレベルでもっと考えて……」

「私のレベルって……なにそれ」

ぼんやりしながら和正を見る優奈。

とさっと鞆が落ちる。その音で我に返り、慌てて拾っていた。

「優奈？」

「……ご、ごめん。私、なんか疲れてたかな」

「ん、ああ。とにかく優奈は頑張り過ぎだよ。もうちょっと肩の力抜いてさ」

「うん。ごめん、なんか変に気を遣わせちゃったね」

「いや、いいよ。ほら、もう遅いし帰ろうぜ」

「うん……」

俯いて歩きだす優奈の足は少し早い気がした。夏の日の夕暮れ時といえど、そろそろ暗くなる。思った以上に時計は進んでいるのだから当然と、和正もそれに倣う。

「……それじゃあね」

「ああ」

分かれ道へ来て軽く会釈する優奈と和正。

「さよなら、田所君」

「じゃあな」

うしろ手を振りながら帰る和正は、何か違和感を覚えて振り返る。

とぼとぼと歩く優奈に掛ける言葉が思いつかず、そのまま踵を返した……。

放課後の練習に法子がやって来た。

彼女は在学中に音楽系の部活・サークルに入っていて、課題曲の伴奏は少しの練習で流暢に弾いていた。

「……はい、テノール、アルトにつられない。アルトはもっと声出して」

音楽の教師さんながらに指導を飛ばす法子に、皆いつもより緊張感のある練習ができた。

「ん、ちよっとバスが足りないかしら。男なら女に負けないように声出して。普段はもっと大きな声でおしゃべりしてるでしょ」

彼女らしくない軽口に場の空気も悪くない。

「ちよっとちよっと、ダメよ。テノール、音が変。ちゃんと楽譜見てるの？ はい、それじゃちよっとテノールだけ立って……」

テノールの伴奏を弾き、法子が違和感の箇所を何度か歌わせる。

「ちょっと違う。左、菊池君から左の人、座って……はい、さんし……」
テノールの半分を座らせて歌わせる。

「今度は右立って、左座って……さんし」
今度はもう半分に歌わせる。

「……ちょっと違うかしら。三列目だけ」

三列目の男子が歌わされる。声は小さいが、伴奏に添ってテノールの歌声を頑張っていた。

「……二列目……」

続いて二列目の男子。声はそこそこだが、首を傾げる人が増える。

「……もう一度……」

もう一度二列目の男子。やはり違和感がある。ずれが他に比べて大きいのだ。

「……さんし……」

法子は左半分を座らせてもう一度。

「さんし……」

さらに数名座るよう指示してもう一度。

「……だめだめ！ ちょっと田所君、君やる気あるの！」

二人残されたところで和正が名指しされる。

「……」

当人としてはどういう理由でつるし上げられたのかわからず、どう答えたものか、反応が思いつかない。

「君ねえ、音が外れてるのよ。テノールの音はこう！」

オルガンを乱暴に弾いてみせるが、音楽に興味の無い和正にはどう違うのかわからない。

「音痴なのはしょうがないけど、合わせる気が無さすぎでしょう……」

うんざりした様子でばんと鍵盤を叩く。

「もういいわ。はい、次アルト……。立って」

法子はため息交じりにアルトの伴奏を始める。

「……♪」

「……声が小さいわ。半分座って……」

また同じように半分座らせ、右左。三列目、二列目として数人に絞る。

「……北村さん、ずれていきます」

「はい、すみません……」

「もう一度」

「……♪」

「もう一度……」

「……♪」

「……はぁ……」

法子は再びため息をつく、ソプラノを見る。

「次、ソプラノ、立って」

改めてソプラノの伴奏を始めると、今度は満足のいく様子だった。

「うん、ソプラノは練習を真面目にしているようね。でも、他のパートが全然声が出ないんじや、合唱として成り立たないわ。もっとしっかり練習するように」

「「はい……」」「

法子はオルガンから立ち上がると、タクトを取る。

「さ、藤原さん、伴奏をお願いね。私が指揮を振るから、一度合わせてみましょう」

優奈からタクトを受け取ると、中央に立つ。藤原がオルガンで演奏し、合わせての練習が始まる。

「……………」

「……………」

ソプラノは合唱部、吹奏楽部が多いだけあって指揮者の意味合いを理解しているが、アルト、バス、テノールはそうでもない。

すぐに法子はタクトを振りまわし、演奏を止めさせる。

「やめやめ……。ん、まだちょっと全体練習は早いわね。ソプラノ以外、声が小さいし、音が外れてる子が多いわ。北村さん、田所君、君達はしっかりと楽譜の意味を理解して、しっかりと練習に参加してください」

名指しされた春子は真っ赤になって俯くが、和正の方は馬耳東風。その態度に不満らしい法子は和正の方へやってきて睨む。

「君、やる気あるの？ 先生言いましたよね。やる気の無い人は参加しなくて結構です。やる気の無い人が居るとみんなに迷惑なの。君はそうやって音を外してるくせに全然練習しないし、直そうともしない。皆がそれに付いて失敗するのよ。わかる？ 君が足並み乱してるの」

「はい、すみませんでした」

「そうやってすぐ腐れて……。もういいわ。時間だし今日は解散しましょう。練習はまた明日です」

時計を見ると既に四時を回る頃。クラスメートたちはオルガンを片づけ、周囲を軽く箒ではいてから教室に戻った……。

最初こそいつもより実の入った練習だったが、終わりの終わりでケチがついてしまった。

いつもなら少しでも早く部活へ行こうと急ぐ子が立ち止まり、お互い顔を見合わせる。

その視線は交差されつつ、ある男子と女子に向かう。

音が外れている原因はアイツとアイツ。またアイツ……。

楽譜も読めず、読む努力もせず、さぼり癖のある男子。

このところ何かと用事があるからと、そそくさと帰宅する女子。

どちらもさぼりの常習犯。そして音ずれの原因。

「……春子ってさ」

「……あいつ、やっぱり」

「……音痴なのかな」

「……なんじゃない？」

「……だよな。いつもとなんか違う時って、あいつらがいる時だもんね」

ひそひそと囁かれる悪口に、春子は下を向いて俯き、肩を震わせる。

「……どうすんの？ コンクール」

「……さあ？ なるようにしかないんじゃない？」

「……やだよ、他人のせいで恥じかくなんて」

「……ひっぐ……ひっぐ」

堪えられなくなったところで春子が腕で涙を拭う。

「北村さん……」

文雄と話していた優奈が気付き、慌てて駆け寄る。しかし、彼女は首を振り、走り去って行った。

「……北村さん……。みんな、酷いよ。いくらなんでもあんなこと……」

「でも、北村さんが原因じゃない。練習さぼってばっかだし、音は外れるし」

「そうだよ。練習出るなら出るでちゃんとやってくれなきゃ。じゃないとまた先生のお得意のレポートになるじゃん」

「だよ。忙しい忙しいって言うんなら参加しなくていいじゃんね」

「そんな、せっかく参加してくれたのに！」

「いや、皆の言うとおりだよ。やる気が無い人に参加は求めない。やる気のある人で一生懸命やろうよ。やる気の無い奴は出て行っていいんだ。それは北村さんだけじゃなく、皆にも言えるんだ。もし、辞めるといふのであれば、明日からでも参加しなくていい」

厳しい口調の文雄に圧されてみんな口をつぐむ。

「……」

そして向けられる和正への視線。

「はいはい、わかったよ。音痴でやる気の無い俺は参加しねーよ」

無言の圧力を受けて和正は背を向けて、出て行った……。

十十

「田所君まで……待って……」

呼び止めようとする優奈だが、文雄が止める。

「彼はやる気が無いんだ。練習だってさぼるし、楽譜の勉強もしない。そうだろ？」

練習の提案を何度かしていた優奈は、どれも断られてきたことを思い出し、返す言葉が見つからない。

「……うん」

「じゃあ、仕方ない」

「でも、田所君だって本気でそんなこと思ってるはずないよ。だから、もう一度……」

「……、それは好きにするといい。だが、練習に参加する以上、皆の足を引っ張ってもらいたくないのもわかってくれ」

「うん」

妥協点を模索できたことにほっとする優奈。今度こそ、無理にでも和正に楽譜と音程合わせをさせようと思い、片付けもそこそこに和正を追った……。

「おまえさ、そんな気にするなよ。他にもさぼってるやついるんだし」

「……ひっぐ、だって……わたし……」

「しかたないじゃん。音痴ってのは直らないっていうし」

「そんな言い方……。田所君だって……じゃないですか……」

教室に居ない和正を探していると階段の方で話声が聞こえてきた。

「北村が真面目なのはわかるけどさ、肩の力抜くっていうか、張り合うなよ。どうせ合唱なんてこの時期だけなんだし先生も自由参加って言ってんだから逃げろって。当日だって適当に口パクでいいじゃん」

「でも、皆が頑張ってるのに……」

「頑張りたい奴にだけ頑張らせろよ。合唱コンクールっていつでも全員参加のお遊びなんだから、真面目に考え

「切り捨てるなんて……」

「とにかく、いつまでも落ち込んでるなんて市川さんらしくない。君は努力できるんだ。一人でも戦える強い人なんだから、さ、立とう」

手を差し出す文雄に、少し戸惑う。彼のぎこちない笑顔をみて、優奈も笑顔を返す。彼の手を握り、よいしょつと勢いをつけて立ち上がった。

「わ……あ、ごめん」

よろけてしまい、転びそうになる優奈。文雄がそれをしっかりと抱き留めた。

「……ごめん」

そんなアクシデントに優奈は真っ赤になってすぐに離れようとする。

「大丈夫？ まだふらついてるみたいけど」

「んーん、大丈夫」

「そう。もしよかったら送って行くよ。期末テスト対策のことも話したいし」

「そっか。うん、お願い」

誰かにもたれかかったのはいつ以来だろう。文系でひよろりとしている文雄だけれど、ここ最近一緒に活動して改めてわかったことがある。真面目で責任感がある彼となら、きっと合唱コンクールも上手くいくはず。

優奈は照れ笑いを浮かべながら鞆を取りに教室へ戻った……。

＊＊

「応援団に協力してくれないかー！！ 団員募集中！」

学ラン姿で並ぶいくつかの男子が朝の正門前で発声練習兼、募集をしていた。

「フレッフレッ！ オニガワラ！ ダイニコウ！ ワーオ！」

グラウンドでは赤とピンクのユニフォーム姿のチアリーディング部がパフォーマンスで人目を集める。

屋上では吹奏楽部が重低音を響かせ、横断幕で部員募集広告を出している。

七月も中盤に差し掛かると新人戦、期末テストとイベントが混みあう。

毎年実績を上げている女子バレーボール、女子バスケ、女子ソフトボールに加え、野球部までもが活躍していた。

有力な部活には応援団が組まれ、例年通りならバレー、バスケ、ソフトボールに吹奏楽部、応援団、チアリーディング部が行く。そこに野球部が入った為、急遽応援系部活に募集が掛かる。

そのせいで合唱コンクールの練習に二の足を踏むクラスメートも多くなり、参加がさらに減少してしまう。

それを補うため、ホームルームで発表されたクラス委員二人による期末試験対策の配布で事情がまた変わる。

強豪のバレー部女子、野球部、ソフトボール部の子達もクラス委員謹製のテスト対策に興味がある。そのおかげで参加率が改善していった。

「いやあ、助かるわ。夏休みに補習なんてなったら大変だもんな」

野球部が新人戦で優勝をしたおかげで、県大会への期待が高まり、練習時間の延長、グラウンド使用の優先権が与えられた。芳雄の練習量も増え、ついこないだまで参加を渋っていたのだが、テスト対策の噂を聞いて練習を後回しにしていた。

「お前は調子がいいな」

プリントを見て期末に向けて勉強をする芳雄を見て、和正は呆れたように頬杖をつく。

「そういうなよ。俺みたいな馬鹿はこうやって要領よくやらないとな。っていうか、お前は良いよな。市川さんがいるもん」

「ん？ いや、別に」

「なんだよ、そっけないな。いつも……」

ちらりと優奈を見て訝しむ。いつもならテスト近くになると優奈が和正の勉強みにきてくれるのに、最近はおまり姿を見ない。

「喧嘩でもしたの？」

「別に」

「ふーん。ま、市川さんも部活に合唱、勉強もあるもんな。そろそろ和正も市川さん離れる時期だな」

「何言ってるんだよ」

むしろ優奈の方が和正離れをするべきだろうと思いつつ、急に優奈がそっけなくなったことは意外だった。

これまでの年月があり、寂しいという気持ちもある。けれど、彼女のこれからを考えれば、同じステージに立てない自分だと足を引っ張るだけと割り切るように頭に叩き込む。

「あれ？ お前はプリントないの？ なんで？」

「俺は参加してないもん。もらうわけにはいかないだろ」

「そんな、別に……。コピーしようか？ ちよっと書きちゃったけど」

「いいよ。別に」

「んでも、お前の頭じゃ補習必須じゃん」

「なんだよ、馬鹿にしてんのかよ」

「実際馬鹿じゃん」

「……まあな」

「こっそりやればいいよ。別に練習参加しなくたってさ、ほら……」

法子によるつるし上げを気にしているらしく、芳雄は参加を求めない。和正が拒む理由もわかるが、浩司や大吾など、参加せずに仲間からプリントもらうような子もいるのを見ると、一応参加した実績のある和正に便宜を図りたい気持ちがあった。

「見下げたもんだな。田所」

それを咎めるのは別にもう一人居た。

文雄は二人を睨みながらやってくる。

「君は参加もせずに利益だけもらうつもりなのか。他のみんなが一生懸命頑張ってる時に自分だけ都合を優先する。本当に卑怯な奴だ」

教室中に聞こえるというほどではないが、周囲の子は何かと耳をそばだてる。

「ちよっと待ってくれよ。別に和正がくれて言ったわけじゃないぞ。それにこいつは練習にだって参加してたじゃないか」

対策プリントの恩義はあるが、あまりの放言に芳雄は抗議する。

「どうしたの……」

和正の名前と文雄の声に優奈が不安気に顔を上げ、やってくる。

「練習に参加しない田所が僕と市川さんで作った試験対策をもらおうとしてたんだ」

「……ほんと？」

「いや、だから、ちよっとした誤解というか……。俺も他人のふんどしで相撲とるっていうか、余計なことしかけど、でも、その言い方も無いなって……」

芳雄が慌てて弁解を始めるが、優奈は和正を見る。不安を秘めた瞳は瞬きも多く、ちらりと文雄も見ろ。

「別に？ 参加してないし、プリントもらうつもりもないよ。俺は音痴だし、参加されたら迷惑なんだろ」

「そんな言い方。田所君だってちゃんと楽譜の読み方覚えて、練習してくれば……」

「それがめんどくさいんだよ、こいつは。だから上澄みだけはねようとする」

「だから、それは誤解だって。おい、和正……」

話半分で和正は教室を出ていってしまふ。その姿は悪事を咎められてばつが悪くなったようにしかみえず、事情を知らない子は「また田所だ」と納得してしまふ。

せめて説明ぐらいすれば良いのにと追いかける芳雄は慌てて廊下に走り、彼の腕を引っ張って止める。

「おい、どうしたんだよ。最近変だぞ」

「そりや変にもなるだろ。お前が俺だったらどうよ」

「どうって、そりや……」

ここ最近の和正のことを考えると、不連続きというか、喧嘩に衝突続きで良いことが無い。まるで呪われているのではないかと勘繰りたくなるほどだった。

「そういうわけだ」

「どういうわけだよ。っていうか、そういうの説明しないから、どんどん誤解されちゃうんじゃないか。市川さんだって戸惑ってたぞ？」

和正が窓枠にもたれかかるので、芳雄も腕を放し並んで廊下の天井を見る。

「しょうがないさ」

「そういうけどさ、市川さんみたいな頭良くてかわいくて良い子、気に掛けてくれるだけでもありがたいのに、そんな態度とって……贅沢過ぎだぞ」

嫉妬、やっかみで和正の脇を突くが、彼はおどける様子を見せない。

「贅沢過ぎか。それが分相応になろうってこったよ」

「……なんだよ、それ……。お前さ、まさか、身を引くとかそういう感じ？」

「身を引くも何も、俺と優奈は別に何でもないよ。あっちが俺に世話を焼いてくれたっただけ」

できるだけ突き放す言い方をすれば、要領の良い芳雄も言葉の意図を読み取ってくれる。

芳雄は拳を握っていたが、すぐに窓の外に視線を逸らす。

「……うん、まあ、なんだろ。そういうのってある意味では正しいのかしんないけどさ、自惚れっていうか、かいかぶりっていうか、なんか違う気がするだけだな」

「俺だってよくわかんねーよ。でも、おばさんに言われた時、ちょっとわかるかなって思ったし。やっぱり、進む道は人それぞれ。俺と優奈じゃ道も違うんだし、頭の差がはっきりわかったところで少しずつ距離置くのが自然なんじゃないか？ もっとおかしくなったり、こじれたりする前にさ」

「……なんかそれって卑怯っていうかなあ……。つうか、努力しろっていうか」

「勉強しろってか？ 俺に」

「それがベストなんだろうよ」

「はは。万年赤点の俺が勉強か。ま、次の期末のテスト見せてやるよ」

「ったく……。そんなんじゃ本当に市川さんに愛想つかされちゃうぞ」

「はいはい……」

まるで粘土を叩いているような気分になる芳雄は、大きくため息をついて教室に戻る。

「あ……」

卑怯というより臆病なのではないだろうか。そんな考えと一緒に気付く。

「……田所君？」

芳雄の頭に引っ付いた粘土のような違和感は、優奈の和正の呼び方だった……。

期末テストへの不安が解消された結果、徐々に参加人数が増える。

練習に次ぐ練習で上達を感じられるようになると、興味を持ってやる気も出る。

運動部の肉体的な練習と違う刺激に新鮮味を感じたり、普段はできない大きな声を上げられる開放感からか、ストレス解消に繋がっていた。

「だんだん参加率が上がって来たね」

放課後の教室、練習を終えた優奈と文雄、千絵は軽いミーティングをしていた。

一番の懸念のテノール、バスの参加率が改善されたことが成果だった。

「千絵のほうはどう？」

一人表情が険しい千絵は腕組みしながら呟く。

「それが吹奏楽部とかチアリーディング部の子達があんまり参加したがないのよ」

「そうなの？」

「ああそうか。そういえば夏休みの試合の応援場所が増えたみたいだからね」

野球部の快進撃については緊急放送で知らされた。そのこと自体は喜ばしいことだが、そのせいでイベント参加率が下がることは三人にとって悩みの種だ。

「うーん、なんとかならないかなあ……」

参加を促す試験対策プリントに目を落す。クラスのチアリーディング部の女子で参加率が悪いのは石井奈津子と植田和美。

奈津子は学業優秀で試験でも常に上位をキープしている。ゼミに通っているわけでもなく、学年一位を取る彼女相手にプリントは餌にならない。

いっぽう和美は赤点だけ回避できる程度。特に勉強をしている様子は無いけれど、試験対策がいらぬほどでもないだろう。

すると教室にちょうど良く和美と奈津子がやって来る。忘れ物を取りに来た程度ですぐに教室から出て行こうとしていた。

「あ、まって、植田さん」

「ん？ 何？」

ボーイッシュで背の高い彼女のパフォーマンスは迫力があって圧倒される。普通に話す分には美人でスタイルの良い子なのだが、別の意味で圧倒されてしまう。

「あのさ、ええと、試験対策のプリントなんだけど、植田さんもどうかなくって思ってる」

「ふーん、ああ、あれ。合唱の練習に参加したらくれるって奴？」

「うん。そう。どうかな？」

「ふふ、あたしみたいな馬鹿ならプリントちらつかせて参加させられると思ってるんだ」

和美は鼻で嗤う。下心をまるまる見透かされた優奈は口ごもり、反論の言葉を探して目を泳がせる。

「そういうつもりじゃないんだけど……」

「まあいいよ。でも、うちらも部活忙しいんだってば。ね、奈津子」

「う、うん」

「部員の集まりも悪いし、それどころじゃないってヤツ？」

「そうだったんだ。ごめん。呼び止めて」

「ごめんね、優奈。あたしも合唱の練習参加したいんだけど、最近では野球部の相手しないといけないから」

「野球部の相手？」

「相手っていうか、野球部への応援のメンバーを集めて練習させないといけないから……、人が足りないの」「そうなんだ……」

鬼瓦第二校では部活の兼任が許可されており、優奈も合唱と手芸部に入学している。もともと手芸部のように活動が乏しい場合は兼任も容易だが、応援系となるとそうもいかない。応援の都合と自分の試合の都合が重なることもあるからだ。

「千絵、あんた入る？」

和美が千絵に話を振る。千絵は女子の中でも背が高く、チアリーディングに参加しても見栄えが良いだろう。

「あたし？ あたしは合唱部あるから無理かな」

「そっか。じゃあそういうことかな」

「……うーん、やっぱり参加は無理か」

話の決裂ぶりを見てため息交じりに文雄が呟く。

「でも、それじゃあ、優奈が参加してくれたら……」

「え？」

ぼそりと奈津子が呟くのを優奈達は見逃さなかった。

「私？ 私なんかが参加して大丈夫？ だって運動苦手だし……」

「あ、えと、その……嫌ならいいんだけど、でも、運動は別に苦手でもいいよ。助っ人部員には簡単なダンスをお願いするぐらいだから……」

「そうなんだ……」

「ふーん、優奈がチアリーディング部かあ。いいんじゃない？ それで二人が参加してくれるんなら、もうけものじゃん」

躊躇う優奈の肩を押す千絵。

「え、優奈一人参加するだけであたしまで？ うーん、なんかなあ……でもま、夏休みとか参加してくれるならいいけど」

「だってよ。どうする？ 優奈」

「私は……」

「いいんじゃないかな？ 市川さんがチアリーディング部に参加して、植田さんと石井さんがアルトパートの練習に参加する。今は一人でも多いほうがいいんだし、良い条件だと思うよ」

「でも、運動苦手だし」

「市川さんが運動苦手だって気持ちはわかるけど、でもだからこそそれに挑戦するほうがいいんじゃないか？ 田所みたいに嫌なことから逃げるんじゃないくて、自分から新しいことに挑戦していく。それって素晴らしいことだと思うよ」

文雄のアドバースに千絵も腕を組んでうんうんと頷く。

和美はそっぽを向いて表情が見えないけれど、奈津子が心配そうに優奈を見つめていた。

「優奈、無理だったらいいのよ？ 勉強とかも大変だし……」

ゼミに通わずとも学年トップクラスの奈津子に言われると煽りに感じてしまう。彼女はチアリーディング部で休みに関わらず応援で各地を回っているというのに結果を出している。それに比べて自分は苦手だからと理由を付けて断ろうとしている。和美に対し、赤点と天秤にかけるようなお願いをしておいて……。

運動から逃げている。苦手だから。疲れる、格好悪いから……。

それでは誰かと同じ……。

「やる。私やるよ」

「え？ いいの？ 優奈」

「うん。大丈夫だよ。後ろで人数合わせの賑やかしなんでしょう？ それぐらいならいくら私だってできるよ」

「ほんと？ うん、嬉しいけど……、それじゃあお願いしようかしら……」

「うん。任せてよ」

「ふーん、ま、あたしとしては別にいいけどね。えと？ アルトの練習だっけ。ま、気が向いたら参加するよ」
和美はそれだけ言うと先に教室を出る。

「あ、ちよっと和美……もう。ごめんね。でも、和美もあ見えて約束は守るから。えと、その、本当にいいんだよね？」

「うん。ただ、ゼミとかの時間もあるから、それだけは」

「うん。それは大丈夫。開いている時間に参加してくれたらそれでいいから……」

「わかった。それじゃあ奈津子達は合唱の参加、私はチアリーディング部の助っ人ってことでいいね？」

「うん、ごめんなさい」

「んふ、ありがと」

「あ、ええ、そうね……。それじゃ、あたしは練習あるから……」

「はい」

作り笑いを浮かべながら和美を追う奈津子。優奈は胸の前でぐっとコブシを握り、新たな挑戦に息巻いていた。

「頑張ってるね、市川さん」

「うん、頑張る」

文雄の激励を受け、優奈は笑顔で応えた……。

「はい！ それじゃあ今度は合わせて練習するよ！」

良い感じになってきたことで、優奈は笑顔でタクトを振ることができる。

千絵の話によれば、奈津子と和美も真面目に参加してくれているおかげで音量が増えた。おかげで合唱らしい形になり始めた。

まだどこかにクラスメート全員で取り組みたい気持ちがあるが、それを蒸し返したところで今参加している人に迷惑を掛けると飲み込むことにしている。まるで喉にささる小骨のような感じで、一人になると悩んでしまう。

「うん！ 良い感じだよ。このままいっぱい練習して、優勝しちゃおう！」

だから最近は一人で居ないようにしている。

期末試験も近づいているから休み時間に勉強を聞きに来る子もいる。対策プリントのことで文雄に相談したり、合唱の指導を法子に依頼したり、手芸部に参加したり、チア部の練習に参加したり……。

大きな鞆を持つようにしている。荷物が全部一度に入れられるようなモノ。放課後に教室に残っていると、まだ気にしている場所を見てしまつて戸惑いが生まれるから。

英語の時間は苦痛だった。

初期の英語で躓いたまま、今に至るのが原因だろう。

和正は適当に板書を取り、ただ漫然と時間が過ぎるのを待つ。

「それでは、ペアになって練習しましょう」

教員の指示に従って、みな席を立つ。

和正は教科書を持ち、芳雄の席へ行こうとする。

今のクラスは親しい友人がほとんどおらず、英語の時間はいつも芳雄とペアを組んでいた。こういう時は持つべきものと自分の方が都合よく芳雄にすり寄るのだと、人を笑えなかった。

「……あ、そっか」

誰も居ない席を見て今日、芳雄が欠席だったのを思い出す。だから今日は静かだった。どうしたものだろうと思いい、辺りを見るが、もうみんなペアを組んで練習をしている。

誰かに頼み込んで参加させてもらえればよいのだが、和正としても最近の出来事で自分が受け入れられていないことを理解している。

他人に嫌な顔をされることは辛いものがあり、二の足を踏んでいた。

「……田所君」

それに気づいた優奈が席を立とうとするが、千絵が袖を引っ張る。

「優奈の番だよ。どこ行く気よ」

「あ、ごめん」

優奈は急かされ、教科書に目を落す。

「田所君、まだペアが見つからないんですか？」

英語担当の目下部博史が尋ねる。見ればわかるだろうと言いつつになって、慌てて「はい」と頷いた。

「じゃあ、北村さんとペアになってもらおうか。こっちきて」

温和な表情、紳士的な態度で物腰緩やかな印象がある博史だが、意外と押しが強く、彼の授業でおしゃべりは少ない。

あまりおしゃべりが無いのは、彼がおしゃべりをしている人の内容を英語に直して皆に復唱させたりするからだ。さすがに浩司や大吾も閉口してしまい、ぼんやりしながら終わるのを待つしかない。

いつもなら春子は他の子と練習をしていたはずだった。ただ、最近はまだペア練習をあてられることが無い。その原因は彼女が博史と一緒に練習をしているから。

「……よろしく」

「……うん」

特に親しいわけではないが、変な形の縁を持つてしまったことで気まずさがある。

和正は早口で教科書を読み、春子も小声でぼそぼそ呟く。

会話のキャッチボールというより、暴投を繰り返すだけのような感じだった。

「……それじゃ」

「……うん」

最期のフレーズを読み終えたところで軽く挨拶して席に戻る。

ちらりと向けられる奇異の視線。男女の性差を意識する年頃だからというよりも、除け者同士がくっついたことへの冷やかしが強い。

それを無視して席に戻る。その内にペア練習が終わり、簡単な会話と板書、復唱が行われて授業が進む……はずだった。

髪というか頭に何かぶつかった。

小さい何かの欠片。気のせいかと思ったが、机に転がる消しゴムのカスを見て、意図的だと感じる。

どうせ浩司が大吾だろうと思い、そのままにしておいた。

＊＊

「北村さん、あんた、練習さぼってるんだし、図書館掃除代わってよ」

ホームルームを終えたところで、バスケット部の女子が春子に言う。

「え、私は用事があって……」

「用事用事ってつまようじかよ。いいじゃん、たまにはさ。じゃ、お願いね」

「そんな……」

外せない用事のある春子は押し付けられた仕事に困ってしまう。

「一人じゃ無理なら彼氏でも誘えばいいじゃん。おい、田所、あんたもどうせ暇なんだから手伝ってあげなよ。

彼女が困ってるよ」

教室を出ようとしていた和正を呼び止める声に振り返る。

「なんの話だ。俺だって暇じゃねー」

練習時間の限られている水泳部なので、掃除の無い日は早く行きたいのが本音。

「は？ 皆が一生懸命練習してる時にさぼってるくせによく言うよ」

「練習だけじゃなく掃除も一生懸命やれよ」

売り言葉に買い言葉だが、クラス内での立場が悪くなっている和正には批難の目が集まる。

それに加えて春子にさぼるよう提案していた後ろめたさもあり、このまま何もせずというのも自分の言葉に責任を持たないようで気がひける。

「わかったよ。図書館だな。今日だけだぞ」

和正はそう言うのと鞆を机に投げ捨て、掃除用具手に教室を出る……。

図書館の掃除は埃取りや机椅子の整頓など簡素なもの。たまに棚の違う本があったら受付に持って行って、後日図書委員に整えてもらう程度だ。

ただし、かなり広いために相応の時間がかかる。

和正ははたきを手にも本の背表紙と上の部分を撫でて回る。どうしても埃が溜まっており、げぼげほと咳き込んでしまう。

「おーい、和正」

野球部のユニフォーム姿の芳雄がやって来る。室内なので帽子は背中にしており、その姿が少し間抜けだった。

「おいおい、ここはグラウンドじゃないぞ」

「知ってるよ。手伝いに来てやったんだから感謝しろよ」

「別にいいよ。これぐらい……」

すぐ終わると言いたいのが、今日にかぎって椅子やテーブルが動かされている。誰か何か使ったのかわからないが、一人で引きずりながらするとなると、かなり時間がかかりそうだった。

改めて春子一人に任せなくて良かったと思いつつ、芳雄の協力に感謝したくなる。

「ああ、ありがと。そっち持って」

「あいよ」

まずは大きな机を片づけようと左右に分かれて持ち上げる。

「……ふう」

一つ運んで一息ついて、また一つ運んで一息つく。意外と重く、床も絨毯じきなので引きずることもできず、かなり面倒だった。

「しかし、酷いよな」

「何が？」

「何がって、そりゃいくらなんでも合唱練習しないからって掃除押し付けろなんてさ」

「別に一日ぐらい」

「おまえはな。でも、北村さん、かなり押し付けられてるみたいだぞ」

「そうなのか？」

「うん。なんか、そういう雰囲気出てるんだよ」

「へえ」

自分への非難めいた視線を感じることは多かったが、特に親しいわけでもない春子への関心は薄く、気付かなかった。

芳雄が気付いたことに彼が春子を好きなのかも？　と思ったが、元々彼は周りをよくみている。彼は都合よく、要領よい。自分とは違う。そう思った。

「……」

そこへ春子がやってくる。彼女もはたきをもっており、掃除をするつもりのようなだった。

今の話を聞かれていたかとも思い、苦笑いを浮かべる芳雄。心配しているとはいえ、当人に聞かせて気分の良い話でもない。

「気にしないでいいです。私、平気だから」

それを察してか、フォローにならないフォローをする。

「そう。はは、ま、なんていうか……」

「それより二人とも良いの？　部活あるんでしょ」

「ああ。けど、これ全部やってたら北村も遅れるんだろ。なら仕方ないさ。俺も合唱の練習さぼってるんだし、同罪だよ」

「お前の場合は水泳部だけでもんな」

笑いながら机を運び終える。次に椅子を運ぼうとしたところで、また一人来客があった。

「……北村さん、大丈夫？」

「なんだ、優奈か。合唱の練習は良いのか？」

和正は何げないつもりで言ったのだが、優奈も春子も顔を顰める。今三人が掃除を押し付けられているのは合唱が原因であり、皮肉にしか聞こえない。

「合唱は浜崎先生が来てくれてるから……。それより、北村さん、用事あるんだよね。私が代わるから」

「大丈夫です。それよりも、いつも練習出られなくてごめんなさい」

「いいの。別に気にしなくて……」

「……」

取り繕うようにいうけれど、空気は重いまま。

悪く取ればやる気ない人なんだから来なくて良いととれてしまい、事実、参加しているクラスメートの中にはそういう態度を取る子も増えている。

「……あのさ、やっぱこういう風に掃除とか押し付けるのって良くないから、また一度話し合いをしようと思うんだけど、北村さんも田所君も何か言いたいことあるかな」

優奈なりに思うところが残っており、それが今日の掃除押し付けで発露し、やってきたようだった。

「そ、う、だよな……。和正にだって言い分はあるんだし、言いたいことは言っといたほうがいいと思うぞ。何も黙りこくってなんでもはいはい掃除しますよりいいよ」

「そうだよ。ね、このままじゃ、なんでもかんでも押し付けて……」

「大丈夫ですよ。もう一週間も無いですし……」
春子は諦めているらしく、首を振る。

「……でも、それじゃあ……。せっかくクラスが一つになろうって時なのに……。それに北村さんも、少しぐらい時間を取って参加してくれたら……」

「……なあ、北村さんだって予定があるんだし、あんまり合唱中心に考えないほうがいいんじゃないか？」

「……どういう意味？」

「だから、さ、合唱コンクールって言ってもあくまでも校内合唱コンクールなんだし、別に外から表彰されるわけじゃないお遊びなんだからさ。北村さんは北村さんで家の用事があるんだろ？掃除や勉強みたいに他人が何とかでできない事情がある人もいるんだ」

「でも、せっかくみんなで……」

「皆でって言っても、俺や北村さん以外にも参加してない奴多いだろ？大崎とかバスケット部男子が結構さぼってるじゃん。それに、いくらコンクール近いって言っても、それを理由に掃除さぼっていいのかよ。これじゃどっちがやりたいことやってるのかわかんないじゃん」

「そんな言い方……。もともと皆がさぼるから、私だっていろいろ考えて……」

「あ、いや、市川さんや筒井が頑張ってるのは皆知ってるよ。俺も和正だってお世話になってるしさ。でも、北村さんと和正も押し付けられてるわけで、不満あるだろうし……。ほら、なんていうか、悪い奴は別に居るわけで……」

陰悪な雰囲気芳雄は慌ててとりなそうと矛先を変えようとする。

「皆で一生懸命頑張ってるのに、どうしてそんなに二人とも消極的な……。せっかくみんな、参加してくれて、合唱らしくなったのに……。そりゃ掃除押し付けるのは良くないよ。でも、それなら参加してくれたらいいじゃない……。そうやってあれはしない、これはしないって逃げてるだけじゃ、何もできないよ」

俯き、震える声で言う優奈。

「……私にだって用事があるんです。私はみなさんに文句言ってますし、参加しなくて良いと言ったのは先生やみなさんのほうじゃないですか……。それなのに、なんでそんな言い方……。おかしいじゃないですか？」

黙っていた春子だが、掃除の手を止め、優奈を見返す。

「それは……。だって、皆で協力するイベントなんだし、参加しないと……」

「掃除を押し付けたのは市川さんじゃないです。けど、結果的に市川さんだって肯定してますよね。やる気が無いなら参加しなくて良いと言っておいて、いざ参加しなかったら、こうやって掃除を押し付ける。私は何も言っていないのに、市川さんは逃げてるって……。私、両親共働きだから、家に帰って弟の面倒とか見ないといけないんです。それって合唱コンクールより大切なんです。わかってくださいなんていいません。でも、そうやって自分の意見を押し付けるのもやめてください……」

「……私、そんなつもりじゃ……」

「……まあ、なんだ。とにかく、優奈も北村も一度頭冷やせよ。たかが学校内のお遊びなんだし、そんなことで喧嘩しても仕方ないだろ」

「お遊びだなんて！　そういう言い方酷いよ！」
たまらず声を荒げる優奈は、口をぱくぱくさせたあと、ほろりと涙を流す。

「……ごめん」

優奈は短く言うと、図書館を出て行った。

「おおお、おいおいおい、いくらなんでも言い過ぎだろ。和正、お前らしくないぞ」

芳雄もさすがに困惑気味で、険しい顔になる。

「……ああ。今のは言い過ぎたか」

「言い過ぎっていうか、お前、情況考えろよ」

春子と和正を交互に見ながら、どちらを責めるわけにもいかず、芳雄はしばらく黙りこくる。

「ふう、あと俺がやっとくから良いよ。芳雄、ありがとうな。手伝ってくれたおかげで助かったわ。北村もさつさと帰れよ。用事あるんだろ」

「……」

こくりと黙って頷き、春子も図書室を出る。

芳雄はまだ何か言いたそうだったが、今はその時ではないと結論付け、部活へ向かうことにした。

「……はあ」

もやもやした気持ちを抱えると作業が遅くなる。和正はぼんやりしながら残りの作業を終えた……。

＊＊

夜、和正は自分の部屋で期末試験に向けて勉強をしていた。

地頭のよろしくない和正は何度も同じようなところで躓き、ノートを開いてもどこがどうまとめられているのかわからず、遅々として進まない。結局、答えを写して勉強した気になるだけだった。

時間が経つにつれて気持ちちが沈む。

優奈と距離を取るべき。この考え自体はそれほど間違っているとは思わない。けれど、その方法が急すぎる。

積極的に嫌われる以上に、これではただの嫌な奴でしかない。

問題集の間に詰まると、優奈の涙を思い出してしまう。そして手を止め、答えを見る。正解を見ても、今日の答えはどこにも載っていない。

「和正ー、優奈ちゃんから電話よー」

そんな思考を母の呼び声が中断させる。正直、出たくないけれど断る理由が思いつかない。待たせるのも悪いのでどたばたと階段を降りた。

「久しぶりだね。優奈ちゃんからの電話」

「そんなんじゃないっての」

母は変な笑顔を浮かべるのが苛立たしい。和正は受話器を受け取ると、気にしてないのを装ってぶっきらぼうに言う。

「……優奈か。どうした？」

『うん。今日は、なんか変な感じになっちゃってさ……。ごめんね』

「……なんだ、そんなことか。いや、俺も言い過ぎたわ。別に練習を邪魔する気ないし、言葉を間違えたっていうか」

『うん、知ってる。田所君、そういうところ誤解されやすいもんね』

受話器の向こうでくすくすと笑い声。気を取り直したのか、それとも空元気なのかわからない。

「私もなんかいろいろ見えてないっていうかき、明日、北村さんに謝るね」

「そうか？ うん、そっか」

もう一つの溜飲が下がる。優奈と春子が仲良いわけでも無いが、それでも自分が抱えるようなもやもやを抱かせたままというのも嫌だった。

普段大人しい春子が勢い任せに意見したのも、和正が変に肩入れしたことも原因だろう。むしろ自分の余計な考えが二人の折衝を誘発したようで不安だった。

「それだけか？」

「うん。田所君にもちゃんと言っておかないとって思ってた。なんか改めてごめんっていうの恥ずかしかったから、電話でね」

「気にしてないって。むしろ、俺の方が言い過ぎたからさ……」

「うん。ありがと。おやすみね」

「はいはい、おやすみ」

和正は通話が途切れて無機質な音がしたあと、受話器を置く。

「はあ……」

ほっと一息ついて部屋に戻ろうとすると、後ろでせんべいをかじる音がした。聞き耳でも立てていたのだろうか？

＊＊

その日の英語の時間も、和正は春子とペアを組んでいた。

いつもなら芳雄と一緒にペアを組むのだが、以前のことで博史が組むように促したからだ。

「……なんか羨ましいと言うか、お前ふざけんなよ」

「なんの話だよ。とりあえずお前ミケな。ほら、ミケ、しゃべれよ」

「ミケじゃねーよ、マイクだろうが」

芳雄も含めて三人で会話練習を行うこととなる。とはいえ、芳雄が加わったところで、和正に向けられる視線のとげとげしさは和らぐこともない。特にそれは……。

ホームルームを終えて部活へ向かう和正。

今日は掃除を押し付けられておらず、荷物を持って着替えに向かう。

「……」

ふと気になって教室を見る。春子もそくさと教室を出ていくのが見えた。

きつと優奈が提言してくれたはず。彼女は自分が良いと思ったら行動に移すのが早いし、きつと春子とも仲直りしたはず……。昨日の電話は宣言することでやる気を出そうとする彼女なりのジンクスだ。

そう思い、教室を出た。

「……北村、ちょっといい？ 今日の掃除当番なんだけどさ」

教室から出てきた女子が春子に呼びかけた頃には、既に和正は階段を下りていた……。

和正に「春子に謝る」と宣言したことで自分を追い込んだつもりだった。

朝いちばんに謝りたかったが、彼女は遅刻ギリギリに来る。そしてホームルームが始まってしまい、機会を逸した。

休み時間に声を掛けようとしたけれど、彼女は教室にいつかない。最近のクラスの雰囲気馴染めないのが原因だろう。

「どうしたんだい？ 市川さん」

休み時間、練習の打ち合わせに文雄が来る。傍目からみても焦りが浮かんでいるらしい。

「昨日も練習休んだみたいだけど、体調が悪いのかい？ 体調管理は自己管理だよ」

「うん。ちょっと、春子さんのことで……」

「北村さんがどうかしたのかい？」

「昨日なんだけど、なんか北村さん、掃除当番押し付けられてるみたいで……」

「押し付けられてるって、それは彼女が断るべきなんじゃないか？」

「それが、合唱の練習をさぼってるから暇だらって。そういう理由でバスケット部の子が……」

「そうだったのか。それで市川さんが悩んでたってわけか」

「……うん」

「確かにそれは問題だ。合唱の練習は大事だけど、それがイジメのきっかけになってはいけないね。浜崎先生に相談して押し付けをしないように言ってもらう必要がある」

「でも、先生も全部できるわけじゃないし」

「……市川さんの気持ちもわかるけど、こういうのは当人にも問題があると思うよ。北村さんだって本当に用事があるならちゃんと断るべきだし、自分で動くべきなんだ。それに同情するの市川さんの良いところもあるけど、でも、それじゃあ北村さんの成長に繋がらない。時に突き放すことも大事だよ」

「……そうかな」

「僕は逆に、練習で参加しないのであれば、今のように掃除当番を代わって、参加している人のフォローに回るのもありだと思うんだ」

「フォロー？ ああ、そういう手伝い方もあるんだね」

「そうだよ。それに、言いにくいけど、北村さんは歌があまり得意じゃないし、下手に参加されても……」

「……」

以前の練習で浮き彫りとなった春子の音痴具合は記憶に新しい。少し笑ってしまうけれど、なんとか我慢する。

「とりあえず、昼休みに先生に提言しようか。それより、試験対策のことなんだけど、ここをいいかい？」

「うん、なんでも聞いて」

文雄に相談して気が楽になった気がする。自分にとって建設的なことを指摘してくれる文雄は頭が良いだけでなく機転が利く。やはりクラス委員に選ばれるだけあって賢いと感じた。

英語の時間だった。

ペア練習で千絵がやってきて、いつものようにロールプレイする。

二回ほど繰り返し返して練習したところ、千絵が袖を突く。何か発音ミスをしたのかなと思って彼女を見ると別の方を指さした。

和正と芳雄がペアで練習をしているのが見えた。いつもの光景だった……が、少し違った。そこには春子の姿がなかった。

芳雄が和正につっかかり、それを見て春子がくすくす笑う。

どうして春子と和正が……？ この前もそうだったけれど、あの時は芳雄が休んだからたまたま……。それがまた……。どうして？ 春子と和正はそういう関係なのか？

「……また田所と北村がいちゃっているよ」

「……授業中ぐらいみせつけんнатての」

「……なにそれ。あんたまさか妬いてるとか？」

「……ないない。落ちこぼれ同士、お似合いなんじゃない？」

近くの女子の嗤い声が聞こえる。

やはり、そうなのだろうか。

和正はやたらと春子の掃除を手伝っている。

最近、自分に対してつつけんどん。

なのに、春子には庇ったり、肩をもったりする発言ばかり。

昨日、電話した時も、自分が春子に謝ると言ったら声が明るくなった。

いつも早く帰ろうとしているのは、合唱の練習をしないのは二人で帰るため？

本当は二人、実は……？

「浜崎先生、合唱の練習なんです」

「音楽室を使えますか？」

文雄が口火を切ろうとしたところで優奈が遮る。

今日の練習場所に関して了解を得るのも重要だが、先の休み時間の時の悩みではなく、文雄は意外そうに彼女を見る。

「ええ。大丈夫です」

「そうですか。じゃあ、先生に指導をお願いしますか？」

「うん。最近は皆やる気が出てるし、先生も協力するわ」

「ありがとうございます。それでは失礼します……」

「はい、練習頑張っね」

お辞儀をして職員室を後にすると、しばらくして文雄が立ち止まる。

「市川さん、掃除の押し付けについては良いのかい？」

「うん。よく考えてみたけど、筒井君の言うこともっともだし、ちょっとぐらい協力してもらってもいいかなって思っ」

「そう」

「それに、困っている本人が先生に言うべきだし、口を挟むのも良くないかなって」

「ああ、その通りだよ。自分のことは自分でやらないと。自立するっていうのはそういうことだよ」

「だからこの話はこれでおしまい。もちろん、北村さんが本当に困っていたら、クラスメートとして協力できそうなのはするけど」

「市川さんは優しいね。そういうのが君の良いところだよ」

「……」

優奈は文雄に背を向けると、視線を廊下の窓、外の、遠くの空を見ながらぼんやり歩いていた……。

合唱コンクール当日、町の多目的ホールは河原町校の生徒でいっぱいだった。生徒の親も集まり、賑わいでいた。

「みんな、頑張ろうね！」

「うん！」

「がんばろー」

いたるところでやる気を鼓舞する号令を掛けていた。

和正達のクラスも同じく円を成して掛け声をしているが、他に比べて参加率が悪い。

それでも文雄は「少数精鋭でもがんばろう」と言っていた。

音楽の時間程度しか練習に参加していない和正や春子はその輪に入れず、少し離れたところで時間を潰す。

大吾や浩司、他女子バスケット部の子も不参加なのだが、ある程度数が居るせいかそれほど悪びれる様子もみえない。

「……」

「どした？ 和正」

「ん？ いや」

どのクラスにも同じように温度差があるのだが、和正のクラスだけまるでクラスが断絶されたかのようにはつきりしていた。

去年の合唱コンクールはそうでもなかったのだが、今年はどうしてこうなったのか？ 言われるままにさぼった自分と思うのもおこがましいが、練習方針が間違っていたとを感じる。

「なんかな。不安になってくるわ」

芳雄も同じような感想を抱いているらしく、難しそうな顔で他のクラスを見ていた。

十十

控室、鏡張りの部屋で身だしなみをチェックする。

練習参加組のやる気は十分だ。本当は皆に参加してもらいたかったけれど、練習方針は最初に決めた。責任を持つて、やる気をもって取り組んできたのだから、きつとうまくいく。

ぐっとコブシを握りしめ、優奈は自分達の出番を待った。

リハーサル無しの一回勝負。

アナウンスの声に促され、舞台へ向かうクラスメート達。

タクトを持った文雄が前に出て、観客にお辞儀をする。

皆の顔に緊張が走る中、指揮棒が舞う。

伴奏が始まり、皆の歌声が広がる。

……………♪

順調な滑り出し。他のクラスにだって負けていない。それどころかどのクラスよりもずっと良い。事前の音楽の授業でも優勝かもと先生に言われていた。その評価は伊達ではない。

確かな手ごたえを感じたのか、文雄は最期に拳を握っていた。

「……へっ」

誰かの強い声が聞こえたような気がした。

興奮冷めやらぬ中、舞台袖へ移動すると同時にクラスメートはわっと沸き起こる。

「やったね。超完璧だったじゃん」

「うん！ 練習の通りできたし！」

「あたし、超心配だったよ」

「これ、ホント優勝だよね」

「ありえるありえる」

互いに互いの苦勞を労う中、それを冷ややかに見る子もいる。

練習をさぼっていたバスケ部女子は何が嬉しいのかとばかりに、冷めた表情で「口パクだったし」と嘲りあっていた……。

合唱部と吹奏楽部の演奏が終わった後、しばらくの休憩を待って結果発表が行われる。

審査員を務める校長と来賓の市議会議員が笑顔で壇上に立ち、労いの言葉を並べる。

「みなさん、非常に元気があり、それが溢れる歌声でした。来年はさらに練習を重ねて、今回を経験したことで新たなステージに上がれることでしょう」

一回生への評価は無難な言い方でまとめるが多い。二回生にはだめだしを行い、三回生だと褒め殺しをするのが慣例だ。

「それでは続いて二回生の評価です。ええ、まず三位ですが、一組です。まとまりがりましたが、やや音程の高いところが弱く、ちょっとごまかしが見えましたね。課題の残る歌声でしたが、まとまっております」

一組の喜びと安堵、悔しがる声が聞こえてくる。

「続きまして二位、四組です。声量のバランスや高低音のつなぎ方はとても素晴らしかったですが、まだまだ発展の余地があります。全体的にすこし、声が小さかった気がします。なので僅差として二位といたしました」

二位の結果に四組はウェーブをして喜びを表していた。寸評通りのまとまりをみせていた。

次はいよいよ一位の発表。練習してきた子達は自分達の栄光の姿を予想して、今かいまかと発表を待つ。

「最期に一位ですが、全体的にまとまり、バランスが良く、声量も十分にこのホールに響いていました。課題曲の難所も他のクラスより上手にこなしており、一段違った出来栄でしたね。ええ、大賞は三組です」

背後で歓声が沸き起こる。立ち上がって喜ぶ三組の子達。あまりの大声に担任が「座れ、落ち着け」とたしなめる。

「あらら、あんまりはしゃいでおいたすると優勝取り消しにしちゃうよ？ ふふ、冗談です。ええ、さすがは二回目といこともあり、ほとんどのクラスが良くできていました。ちょっと物足りないところもありましたが、来年に期待しております」

そう結ぶと、続いて最上級生の寸評に入る。

クラスメート達はしばらく啞然としていた。自分達の歌声は完璧だったはず。自惚れではない。たとえ一位が無理でも二位三位ぐらいなら……。そんな気持ちの数分の寸評で打ち砕かれた。

今日まで練習してきた子達は愕然とし、しばらくして肩を落とす。

悔しいし悲しい、けれど泣ける程ではない。ただ、徒勞感が肩にのっかる。

何かの間違いではないだろうか、今から校長と市議会議員に突っかかりたい気持ちもないほどでもない。できれば濁された寸評を知りたい。一体何がいけなかったのか？

担任の法子は通路に立ち、腕を組んだままステージを見ていた。法子も夕方の練習に何度も協力してくれた。その恩に報いることができない不甲斐なさがあり、彼女を見ることが辛い。

ちらりと見えた法子の表情は硬く、何を心の中に隠しているのかわからない。今はただ、申し訳ない気持ちと悔しさがあった……。

＊＊

学校へ戻ってからホームルームが行われる。

今日は校内をほとんど使っていないので掃除は省略されている。

入賞したクラスからは喜びからか笑い声が聞こえていたが、和正のクラスはお通夜ムード。俯く生徒が多い中、無表情の法子は教壇に立ち、しばらく黙っていた。

「……なんでだろうね」

「……わかんない。うちら完璧だったのにね」

「……絶対変だよ」

沈黙に堪えられない子がぼやきだす。いまだ結果が信じられず、理由もわからずじまいで、その不満を溜めていた。

「どうして入賞できなかったか、わかりますか？」

おもむろに法子が口を開く。

「校長先生と審査員の方からの寸評をいただきました。それを読み上げます」

軽く咳払いをしてからメモを開く。

「全体的な声量不足。バスの声がほとんどなく、テノールがかるうじて聞こえる程度。アルトも声が出ておらず、声量のあるソプラノにつられていいるせいで、混成四部合唱が途中から二部合唱になっていた。明らかな練習不足がみられた」

ざわつく教室内。

「男子生徒の声が他のクラスに比べて弱かった。というより全然聞こえない。ソプラノの歌声はよく、選択曲と合っていたが、それでは合唱とはいえない。混成四部合唱で競うコンクールであり、残念ながら選外とせざるを得ない。指揮者の指揮を見ていないのではないだろうか。指揮者は棒を振り回しているだけではなく、曲の流れを見ることがある。練習、及び知識不足が目立った」

ソプラノ以外、褒められるところ無し。そんな寸評にざわめきが強くなる。

「……え、なんで……」

「……うそ」

「……あんなに練習したのに……」

合唱部・吹奏楽部には今回の結末を予想していた子も多く、当然と受け流していた。

「静かに……」

おしゃべりを制し、法子は続ける。

「今回の結果は非常に残念です。けれど、仕方なくも、当然でもあります。私も練習に参加してきましたが、みなさんの取り組みは良いと言えませんが、それどころか、参加する気持ちを感じられません。合唱というのはただ歌えばよいわけではありません。それでは幼稚園のお遊戯です。私はみなさんにやる気が無い人に不参加を促しました。とても残念です。先生はみなさんに負けじと発奮してもらいたく、発破をかけるつもりでいいました。それは伝わらなかったみたいですね」

「……」

「興味が無いことはやりたくない。そのような逃げの姿勢で生きていく後ろ向きな生き方を替えるのは今が正念

場です。今回の失敗を機に、みなさん一人一人が目標に取り組むこと、困難に立ち向かうことを考え直してください。それでは、今から呼ぶ人、レポート用紙を渡します。今回の合唱練習への取り組み方に問題が無かったのか、今一度考え、提出するように……。大崎君、天木さん、横井君、加賀さん……。」「

名前を呼ばれてレポート用紙を受け取りに行く生徒達。それらは不参加の子や、対策目当てで途中参加の子だった。

いくなれば今回の結果の戦犯だ。当然、嫌な気持ちも彼らに向かってしまう。ただ、呼ばれる子のほとんどが粗暴な浩司や大吾、大柄で強気な子が多いこともあって、強く出られる相手が少ない。

「田所君、北村さん……。」「

当然、苛立ちの矛先は反撃の無さそうな子に向かってしまうわけで……。